仁和寺にある法師――「徒然草」から(1)

兼好法師

『徒然草』の基礎知識

『徒然草』は**鎌倉時代**末頃の**兼好法師**による**随筆**。筆者は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての歌人で、出家し、兼好法師とよばれる。『徒然草』には、古い時代への憧れや仏教の**無常観**を背景に、社会や人々に対する鋭い批評が筆者の見聞を通して記されている。『枕草子』と並んで、代表的な随筆文学と評される。

『徒然草』冒頭

①つれづれなるままに、②日暮らし硯に向かひて(イ)、
硯に向かって、
心にうつりゆく③よしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、
心に浮かんでは消えてゆく
何というあてもなく書きつけていると、
あやしうこそものぐるほしけれ。
妙に心騒ぎがすることである。
(序段)

1200 『新古今和歌集』
『方丈記』
『平家物語』
鎌倉
1300
『徒然草』

係り結び

古文には係りの助詞とよばれる語があり、文中で係りの助詞が用いられると、文末などの結びの部分が変化する。これを**係り結び**といい、感動や疑問などといった気持ちを強調する働きがある。

・係りの助詞
「**ぞ**」「**なむ**」「**こそ**」…前の語の強調
「**や**」「**か**」…………疑問・反語

(例) 「山までは見ず。」と言ひけり。
「山までは見ず。」と**ぞ**(係り)言ひける(結び)。(前の発言が強調される)
尊くおはしけり。
尊く**こそ**(係り)おはしけれ(結び)。(「尊く」が強調される)

・古文の文末表現
「〜けり(〜た、〜たそうだ)」・「〜たり(〜た、〜ている)」
「〜なり(〜だ、〜である)」・「〜ぬ(〜た、〜てしまった)」
「〜ず(〜ない)」

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『徒然草』は（**A**）の末頃に（**B**）によって書かれた（**C**）である。

ア 平安時代　**イ** 鎌倉時代　**ウ** 室町時代

エ 鴨長明（かものちょうめい）　**オ** 兼好法師　**カ** 藤原定家（ふじわらのさだいえ）

キ 歌集　**ク** 軍記物語　**ケ** 随筆

A〔　　〕**B**〔　　〕**C**〔　　〕

(2) ——線①「つれづれなるままに」とあるが、これはどのような様子か。適当なものを選びなさい。

ア 忙（いそが）しく、落ち着かない様子。

イ 硯に向かって集中する様子。

ウ 何もすることがない様子。

〔　　〕

(3) ——線②「日暮らし」の意味を選びなさい。

ア ある日　**イ** 一日中　**ウ** 夕方

〔　　〕

(4) ——線③「よしなしごと」の意味を選びなさい。

ア 大切なこと

イ とりとめもないこと

ウ 良くないこと

〔　　〕

(5) 次の言葉を現代仮名遣（づか）いに直し、ひらがなで答えなさい。

あやしうこそものぐるほしけれ

〔　　〕

(6) 次の文に含（ふく）まれる係りの助詞を書きぬきなさい。

聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

〔　　〕